

Title	「執事喫茶」における「BL的妄想」とセクシュアリティ : 台湾人腐女子の「妄想実践」事例から
Author(s)	張 瑋容
Citation	人間文化創成科学論叢
Issue Date	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10083/52848
Rights	
Resource Type	Departmental Bulletin Paper
Resource Version	publisher
Additional Information	

This document is downloaded at: 2017-07-24T04:43:01Z



Ochanomizu University

「執事喫茶」における「BL的妄想」とセクシュアリティ
— 台湾人腐女子の「妄想実践」事例から —

張 瑋 容

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）
2013年3月発行 抜刷

「執事喫茶」における「BL的妄想」とセクシュアリティ

—台湾人腐女子の「妄想実践」事例から—

張 瑋 容*

The Sexuality of “BL Fantasy” in Taiwan: A case study of Taiwanese Fujoshi’s fantasy practice

CHANG Wei-Jung

Abstract

Based on the internalized Japanification in the past and the acceptance of Japanese subculture nowadays in Taiwan, I focus on how BL (“boy’s love”) as a subculture and a kind of fantasy has been imported and reconstructed in Taiwan. Further, to read the specific meaning of sexuality from “BL fantasy”, I use the homosociality theory to analyze that fujoshi take a third person position away from the object of fantasy, and reread the homosexual relationship between men which has been concealed by homophobia and misogyny into BL couplings through the introduction of the love code between men and excluding women from that relationship.

Depending on that, I take the practices of Taiwanese fujoshi in Japanese and Taiwanese “Butler Cafés” as examples, finding out that “distance” plays the most important role in “BL fantasy”. What “distance” means in the process of constructing “BL fantasy” is not only the distance between butlers and consumers, but the “distance” which cuts off the continuity between homosexuality and homosociality is also important. Through constructing “BL fantasy”, fujoshi can relate to the ideal love relationship and have romantic fantasy they project onto BL couplings, and this is what is meant by the sexuality of “BL fantasy”.

Key word: sexuality, Taiwan, Fujoshi, homosociality, fantasy

はじめに

日本の旧植民地の中で「親日」の傾向が強いと言われる台湾社会では、1990年の半ば頃に、若者を魅了する日本のテレビドラマ、音楽、マンガやアニメといったポップカルチャーが広い範囲で受容され、定着している。そこで、筆者はマンガのサブジャンルとして発展してきた、(擬)男性同性愛——つまりゲイではない、「攻め×受け」という想像上の男同士のカップリング——の物語を描写した「BL (BOYS-LOVE)¹」というジャンルに限定し、このジャンルに重要な位置を占める「BL的妄想」を台湾の文脈に位置づけ、そこからセクシュアリティの意味を分析することを試みる。

ここで分析する「妄想」とは、元々マンガ・アニメといったジャンルにおいて、主体がある「原作」を元にして自分を満足させるために無限に生産していくという独自の意味づけが為されてきた²。特に「BL的妄想」は

キーワード：セクシュアリティ、台湾、腐女子、ホモソーシャルリティ、妄想

*平成24年度生 ジェンダー学際研究専攻

独特なセクシュアリティと密着した形で生産・消費されている。筆者は、BL愛好者の腐女子が状況・対象によって妄想と満足感を構築していく動的な過程を「妄想実践」と捉える。この過程において、腐女子は妄想の主体としての自分をどう位置づけるのか、妄想対象との関係はどうなのか、妄想実践から何を求めるのか、といったことに注目することにより、新たなセクシュアリティのあり方を見いだすことができると考えている。そこで、筆者は「執事喫茶³」——ヨーロッパ貴族のお屋敷で、「執事」が「お嬢様」に奉仕するというイメージを実現する喫茶店——における腐女子の妄想実践に注目する。マンガ・小説など完全に虚構であるテキストと異なった「執事喫茶」の構成に、消費者と「執事」の実際のインターアクションが必要とされるため、そこでの「妄想実践」はより動的に見えるのではないか。それ故、「執事喫茶」は腐女子の「妄想実践」の動的軌跡を分析するのに取り上げる適切な事例であると考えられる。

研究方法として、日本と台湾の「執事喫茶」における参与観察⁴及び台湾人腐女子に対するインタビュー調査を行った。日本と台湾の「執事喫茶」を参与観察の対象に設定した理由は、台湾の「執事喫茶」は、日本の影響を受けていることから、両国の「執事喫茶」の差異がどのように台湾人腐女子の「BL的妄想」の実践に影響を与えるかを観察するためである。また、「執事喫茶」における台湾人腐女子の妄想実践を明らかにするために、実際に「執事喫茶」に行った経験を持つ20代の台湾人腐女子15名にインタビューを行い、「BL的妄想」の受容と構築、及び「執事喫茶」における妄想実践について調査した⁵。

1. 台湾におけるBL文化の受容と展開

台湾では、1962年からマンガの検閲を行う「漫画審査制度⁶」の影響で、台湾のマンガ市場は萎縮していた。1973年に、日本文化商品の輸入や日本語の使用への禁止令が実行されたが、1975年には解禁され、日本マンガは、キャラクターの名前を台湾風に変えたり、露出を修正したりする非正規の方法で審査を通過させ、台湾マンガ市場の真空状態が埋められた（李, 2002, 2010；葉, 2010）。1988年「漫画審査制度」廃止後、日本マンガは台湾の出版社を通じて輸入され、今日の台湾マンガ市場の主流を占めている。BLもこの流れとともに輸入、普及されていった。

このような台湾の「BL輸入史」と日本の「BL発展史」はまったく異なる様態を呈している。日本では、BLは70年代に少女マンガから派生したサブジャンルであり、「花の24年組⁷」と呼ばれるマンガ家たちは、女性が理想化した繊細な身体を持つ異国の美少年同士の同性愛物語＝「少年愛」という非常に官能的なエロティシズムのファンタジーを描いていた（米沢, 1980）。この風潮がもたらしたセクシュアリティの意義は、女性が男の体を語る主体になったということにある（石田美紀, 2008）。「少年愛」作品は当時男性に占められていた出版業界からの拒否や抵抗と闘っていたが、70年代の終盤に至り、ようやく『JUNE』、『ALLAN』など女性を楽しませるための少年愛作品を堂々と扱った雑誌が出現した。この「耽美」とも呼ばれる潮流を通じて、「エンターテイメント教養」という独自の体系が作り上げられた（石田, 2008）。80年代以降には、原作の設定や背景を借りて作ったパロディ作品が出現した。これらの作品では性愛場面が多く描かれており、品質が低下していったため、「ヤマなし、オチなし、イミなし」の頭文字を取って「やおい」というジャンルが形成した（石田, 2008；榊原, 1998）。90年代に入ると、オリジナルな男同士の恋愛物語のマンガ単行本『ビーボーイコミックス』や雑誌『マガジンBE×BOY』などの創刊によって、「BL」というジャンルが誕生した。商業化とグローバル化が進む中、BLはマンガ・アニメ・小説の領域を超えて、ゲームやドラマCD、映画などの分野に広がっており、海外でも人気を得ている。

一方、台湾では、日本マンガが解禁される前から、すでに「花の24年組」の作品やそれらに関する二次創作の海賊版が輸入された。80年代には、BLに関する紹介マンガ誌が登場し始めていた（楊, 2005；葉, 2010）。日本マンガの解禁後、BL作品も堂々と台湾の書店や貸本屋に現れ、商業誌のみならず、同人誌もまた輸入され広まっていった。しかし、輸入されたのはテキストや商品のみで、台湾におけるBL文化はその基盤となるファンタジーの文化体系と切り離して、断片的に位置づけられている傾向にある。

BLの輸入は台湾人の創作意欲を刺激し、さらに日本に類似するBL文化を再現しようとする結果、同人誌即売会が台湾においても開催されるようになり、毎回多くのアマチュア作家の作品が販売されている。このように、

日本から輸入されたBL商業誌と台湾人自作の同人誌が台湾のBLマンガ市場を構成した。一方、台湾のBL小説市場はまた異なる光景である。台湾ではマンガを抑圧した「漫画審査制度」があったが、ロマンス小説の歴史は長く、出版社と作家の数も圧倒的に多いため、BLが台湾で盛んになるに伴い、BLの商業誌小説もロマンス小説の市場に浸透していった現状が窺える。

こうしてBL文化が台湾において構築されてきたが、台湾では二次創作「やおい」に対応する適切な訳語がないため、BLは原作も二次創作も含めた「(擬) 男性同性愛の物語」を総括する名詞として使われている。また、台湾におけるBL研究の中で、BLを「クィア・マンガ (queer comic)」と見なし、BLを読むことを社会のジェンダー秩序を挑発するという意味として捉える傾向が窺える(鍾, 1999; 張, 2007; 葉, 2010)。このような読みは日本におけるBL研究と大きく異なっている。その原因は、マンガ文化を育成してきた歴史が希薄な台湾では、BLは他の日本マンガと共に断片的な商品として輸入されたが、BL文化を生み出した基としての「少年愛」や「耽美」などのファンタジーの基盤は輸入されなかったことにあると考えられる。したがって、台湾においてBL文化はコラージュのように構築され、日本のBLとずれた意味を持って位置づけられているとも言える。

2. 台湾における「BL的妄想」の受容と再生産

ここでは、まずは日本に生まれた「BL的妄想」を検討しておく。「男同士の絆」をめぐる「ホモソーシャリティ論」(セジウィック, 2001)によると、男同士の間のホモセクシュアルとホモソーシャルな関係性の間の連続性が、ホモフォビアによって切断される一方で、女性排除のミソジニーによってホモソーシャルな絆が強化される。そして、東園子(2009)はこの論点を踏まえ、男同士のホモセクシャルとホモソーシャルな関係性の間の、一見切断されているかのように見える連続性がBLのカップリングを構成する重要な条件である、と指摘している。さらに、東(2010)は「原作⁸」の男性キャラクターの関係性に基づく二次創作「やおい」に限定し、登場人物間の関係を図示した人物相関図をめぐる物語消費を「相関図消費」と定義して論じている。すなわち、やおいの「相関図消費」の醍醐味は、原作から男性キャラクターの関係性を抽出し、そこに愛のコードを導入することによって男同士の関係を「攻め×受け」というカップリングに読み替え、新しく創った男同士の恋愛関係を楽しむことにある。

台湾人腐女子は日本から輸入されたBLマンガを消費しながら、商品とともに伝わってきた「BL的妄想」の原則を学習・再生産し、台湾で活発なBL文化を構築している。前述の東園子の論点をセジウィックの概念と融合し、筆者は台湾における「(擬) 男性同性愛の物語」を総括する「BL的妄想」の構造を図式化してみた(図1⁹)。図1が示しているように、ホモフォビアによって隠蔽された男同士の関係に対し、腐女子は愛のコードを導入し、特定の女性性(軟弱、涙を武器にする、男に媚びるなど)を持つ女性キャラクターや異性愛関係を排除することによって、ホモフォビアが男同士の関係から消滅し、その関係をホモセクシャルな「攻め×受け」のカップリングに読み替える、ということを通じて、「BL的妄想」を構築する。

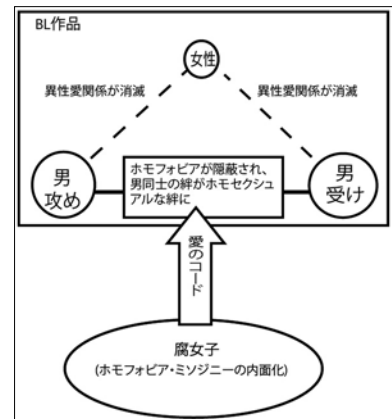


図1 BL的妄想

このような「BL的妄想」に基づき腐女子の妄想実践を分析するにあたり、男同士の絆に対する腐女子の捉え方に着目する必要がある。今回のインタビュー調査から、台湾人腐女子の「BL的妄想」のあり方は様々だが、妄想対象の男同士の関係性に腐女子は介入せずに、一定の距離を置いて妄想する、という「BL的妄想」の原則において共通することが明らかになった。この「距離」には二つの意味がある。一つは妄想を発展させるための「安全装置」である。インタビュー対象者のAさんが述べたように、「客観的な視点で男同士の交流を視る」ということであり、マンガ、小説のみならず、映画、ドラマや日常生活など、あらゆる男性が登場する場面において、「攻めと受けがどうラブラブするか」(Bさん)を観察することによって、彼らをBLカップリングとして妄想するのである。

「距離」のもう一つの意味は、想像上のBLカップリングと現実のゲイ・カップルとの距離である。たとえば、

Lさんにとって、「彼らはゲイじゃない、何か起こりかけなんだけど何も始まっていない状態」というような男同士の関係こそが萌えるという。もしゲイ・カップルになったとしたら、それはBLではなくなるので、妄想は引き起こされたい。東園子(2010)は男同士のホモソーシャルとホモセクシャルが連続するからこそ、「愛のコード」の導入が有効になると指摘しているが、筆者は逆に「愛のコード」の導入が成立するための前提、つまり男同士のホモソーシャルとホモセクシャルな関係の連続性が切斷されているという点に注目したい。この連続性の切斷、つまり筆者が主張する「距離」に基づくからこそ、腐女子は「BL的妄想」を通じて、この切斷=距離を補完することができ、「BL的妄想」が成立するのである。

この解釈に基づき、腐女子はどのように妄想から快感を得るのかという問題に注目したい。「BL的妄想」には、「攻め」と「受け」を構成する見た目や個性の「萌え要素」、及び理想の恋愛関係や幸福感を表現する「萌え要素」も不可欠である。こうした美形の男同士の互いに補い合う「理想の男同士の関係」は、現実のゲイ・カップルとは必ずしも一致せず、腐女子の妄想にしか存在しないファンタジーのような男同士の関係を指す。そして「理想の恋愛関係」においては女性が嫌悪する特定の女性性は排除される。こうして、腐女子がホモフォビアとミソジニーを内面化し、理想的な美男子カップリングに理想的な関係性を託したユートピアのような「BL的妄想」を構築すると解釈できよう。

腐女子はBLのカップリングを理想の恋愛関係として見ているが、彼女たちの視線は基本的に異性愛的である。これは一見矛盾しているように見えるが、「攻め×受け」は理想的関係を表す一方で、安定的な関係に閉じ込められるので、腐女子との関係は絶対に成立しないし、腐女子が異性愛関係の中の性的対象になることを回避できる。こうして、腐女子は自分の欲望を発展させるための安全圏を確保することができる(上野, 2002)。

BLのカップリングに表現される理想の関係性にはさらに重要な意味を持つ。腐女子は近代社会の恋愛観と結びつく「対幻想」、つまり「愛し合わなければ不完全だ」という強制概念を内面化しているが、彼女たちは異性愛関係の非対称性に囚われたくはない。前述した「理想の恋愛関係」とは、BLカップリングに表現された「異質だが対等」という理想の「対」の関係である(上野, 2002)。したがって、腐女子はBLカップリングの関係性やエピソードと自分の過去の経験や理想への期待と照らしあわせることによって、共感を覚えながら、自分も理想の恋愛関係を獲得できるかのような快感を体験できる。この過程に重要なことは、「理想の恋愛関係」というファンタジーを妄想することによって楽しさが生み出されるということである。妄想対象と距離を置く一方で、男同士のホモセクシャルとホモソーシャルな関係を連続させないように距離を置く。こうした両義の「距離」を保つことを前提にし、腐女子は理想の恋愛関係に対する憧れを「BL的妄想」を通じて自由に構築する。BLの純愛エピソード、及び強く愛し合うカップリングが形成した、異性愛関係を越えた理想の恋愛関係に共感し、「萌え」という幸福感が湧いてくる。たとえば、Jさんが「読み終わったら、恋っていいな～とは思う」と述べているように、主体が異性愛にせよ同性愛にせよ、自らの性的志向を超えて、BLに描かれている恋愛関係やエピソードに共感することで、自分も理想の恋愛関係を味わえるように感じられるのだ。以上のように、「距離」を中心に「BL的妄想」の構成を論じてきたが、マンガ・アニメとは異なる次元の、現実の眼前で展開される行動に対する妄想の場合、さらに腐女子主体がそのような行動と関わる場合、「距離」という要素はどのような役割を果たすのか。次章では「執事喫茶」における妄想実践に焦点を当て、この問題を解明していく。

3. 「執事喫茶」における「妄想」実践

3.1 「執事喫茶」という妄想空間の構築

「執事喫茶」における妄想実践を考察するために、まずは「執事喫茶」という空間を説明する必要がある。ここでは、「執事喫茶」を特定の妄想をめぐる二次創作¹⁰として捉え、構成要素や設定を明らかにする。今回フィールドワークの対象にした日本の「執事喫茶」は台湾と異なり、腐女子向けの妄想のあり方に特化しているわけではなく、乙女向けの「お嬢様としての扱い」という妄想が中心となっている。シャンデリアや赤い絨毯で飾られた、ヨーロッパ貴族の「お屋敷」に入ったら、タキシードを着用した執事が迎えに来て、手荷物やコートを預かる。また、どんな用があっても、小さい金色のベルを鳴らして執事を遣うというのがお決まりのやり方である。それだけではなく、執事と客の双方向的な行動も必要な要素とされる。例えば、敬語の使用や優雅な姿勢、丁寧な心

遣いといった執事側のパフォーマンスだけではなく、客に対する「お嬢様」っぽい振る舞いや服装に関する要求も暗黙の前提となっている。(図2)。

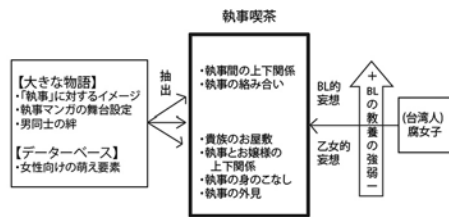


図2 二次創作としての「執事喫茶」¹¹

一方、図3が示しているように、台湾の「執事喫茶」には予約方法・サービスの流れ・執事のイメージ作りなどの日本の「執事喫茶」を参考にして再現している部分もあれば、BL的パフォーマンス及び客との交流の重視、執事の日本風の名前¹²などのオリジナリティも見られる。台湾の「執事喫茶」の成立には厳密な計画¹³がなく、A店の執事へのインタビューによると、ほとんどが従業員が現場で経験を積み重ね、状況に応じて調整していくものである。加えて、「執事喫茶」が台湾でオープンした時期に、「執事もの」の作品が腐女子の間で一時的にブームになっていた¹⁴ことも、台湾人腐女子が「執事喫茶」に対してBL的なパフォーマンスを求める理由となるだろう。その結果、友達のような距離の無さや気遣い¹⁵という「執事との友好関係」、及び親密な男同士の関係を演じるという「BL的パフォーマンス」が台湾の執事喫茶の最も重要な特徴となっている。このような結果も、この店では妄想や設定の表現方法について予め厳格に規定しなかったため、執事が現場で実際に感じた客たちの要望に対応できるように行った実践として捉えられる。

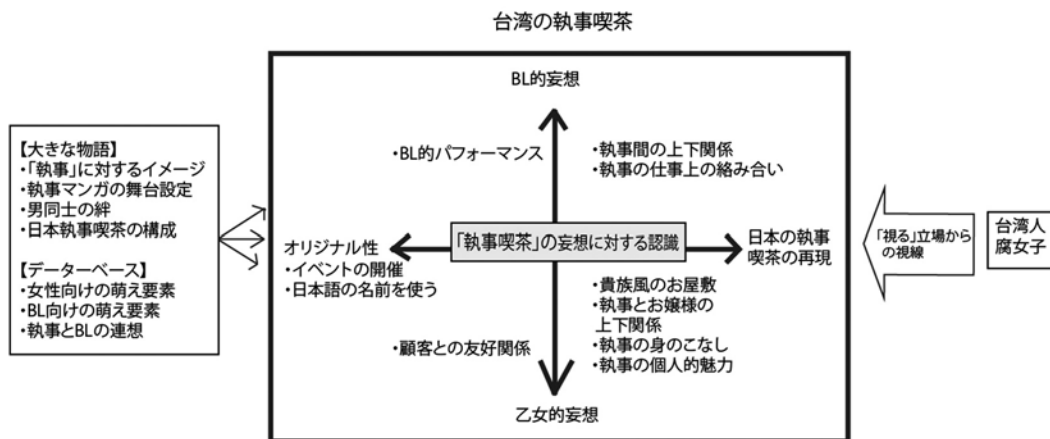


図3 台湾の「執事喫茶」の構造¹⁶

日本と台湾のケースを見ると、「執事喫茶」の構築に重要なのは、「妄想の空間」を最大限に演出するというところにある。つまり、客に妄想の空間に没頭させるために、日常生活と一旦切斷することが必要とされる。何故ならば、「執事喫茶」はマンガ・アニメといった既に設定してある物語とは異なり、その「設定」を実現し、説得力を与えるために、様々な「実践」が必要だからである。たとえば、日本の「執事喫茶」は地下一階にあるということで、地上と切り離れた異空間の感覚を作り出した。さらに中には高級感のある内装、及び様々なキャラクターを演出する執事の演技やセリフによって、妄想の空間を再現している。A店の執事の証言によると、台湾の場合は、出資者の資金の制限のため、高級な内装で妄想の空間を作ることが難しいという。加えて、中国語には上下関係を明確に区別できるような「敬語」というシステムがないため、執事のセリフだけで身分関係を演出することに限界がある。しかし、ヨーロッパ風の家具が設置され、執事が日本風の名前を付け、「お出迎え」と「お見送り」の定番セリフに日本語を使用することを通じて、少しでも「台湾」というローカルな感覚を消し、日常

生活と切り離れた妄想の空間を構築しようとする工夫が見られる。

しかしながら、台湾の「執事喫茶」の構築には、それだけでは不十分である。インタビュー対象者が全員両国の「執事喫茶」を経験済みなのではないが、全員両方の状況を知っており、「執事喫茶」の「本場」が日本であるという認識を共有している。それは台湾の「執事喫茶」を否定するわけではないが、インタビューの結果から、日本の「執事喫茶」に対する好印象や憧れ、むしろ美化したイメージが窺える。これには「本場」の「執事喫茶」への憧れの他に、「日本」への憧れも作用している。たとえば、日本語の多用以外にも、浴衣祭り（A店）や日本語曲のカラオケ大会（B店）などのイベントからも、客の「日本」への憧れに対応しながら、「本場」とは異なるやり方で逆説的に「身近な日本」という錯覚を消費者に感じさせる意図が窺える。

3.2 「執事喫茶」における妄想実践に見るセクシュアリティ

前述した「執事喫茶」のさまざまな基本設定や妄想要素を、どのように捉えるかは女性客の自由である。図2、図3が示しているように、「執事との上下関係」という「乙女的妄想」の設定を受け入れる一方で、執事同士の関係性をBLのカップリングに捉えるという「BL的妄想」も可能である。前者に関しては、執事は「お嬢様」と近い身体的距離でサービスを提供しながら、近寄り過ぎないバランスで「お嬢様と執事」の上下関係を演出し、女性客の乙女心を喚起する。それだけでなく、執事の丁寧なサービスと演技により、男尊女卑のジェンダー体制が逆転し、女性客が男性の執事を支配する、もしくは男性に奉仕してもらうことがもたらす快感を味わうことができる。つまり、「お嬢様と執事」という身分関係に基づく異性愛的な関係に「ドキドキ」させるための演出である。後者に関しては、腐女子客はサービスの過程において親密に見える執事の絡み合いを観察し、BL的に読み替えることができる。たとえば、スチュワード、フットマンなどの執事たちの間の上下関係に腐女子は萌える一方で、彼らが「お嬢様に奉仕する」という共通目的を達成するという点から見ると、彼らの関係は対等で緊密である。たとえばPさんの観察のように、「執事がコップを取りに行つて……その食器棚にね。そういう時に彼らはこっそりと話したり……もしくは新人の執事がベテランの執事に質問をして、そしてベテランの執事がお手本を見せたりするとか。」このようなエピソードをBL的に解釈できるのは、女性客に対するサービスに隠蔽された、執事同士の、切断されるように見えるホモソーシャルな関係とホモセクシャルな関係の連続性に基づくからである。腐女子は「BL的妄想」を通じて、執事同士のホモセクシャルとホモソーシャルな関係の間に隠蔽された連続性を補完し、彼らの「異質だが対等」な関係からBLカップリングの「萌え」の快感を味わうのである。

このような妄想の空間において、台湾人腐女子は身につけた「BL的教養」の有無によって、「乙女的妄想」や「BL的妄想」のパターンを能動的に切り替えている。腐女子歴やBLに馴染む程度を比較すると明らかになる。たとえば、Aさんは主に乙女ゲーム¹⁷と声優が好きで、大学時期からBLも読み始めたが、性描写のある作品はなかなか読めないという。それに対して、Pさんは中高生の頃から翻訳された日本の耽美系小説を読んでおり、現在彼女は「ニコニコ歌い手¹⁸」のパロディ小説を書いている。Kさんも日常生活で身近なものを擬人化したBLカップリングを妄想する。Aさんと比べて、KさんもPさんもBLと接触した歴史が長く、BLに対する受容度もAさんより高いので、BLの教養がより全面的に内面化されていると考えられる。BLの教養の蓄積によって、BLに関する萌え要素に対してより敏感に気が付くため、「BL的妄想」を構築しやすい。その結果、主に執事との異性愛的な交流にドキドキして「乙女的妄想」をするAさんと反対に、KさんとPさんは執事との交流を体験しながら、執事同士の関係性も観察し、自分の中で「乙女的」と「BL的」のパターンを切り替えて妄想するのである。

ところで、前述したように、台湾の「執事喫茶」と日本の最も顕著な差異は、執事との友好関係という「乙女向け」の表現、及び「腐女子向け」のBL的パフォーマンスであるが、インタビューの結果を見てみると、女性客の反応は賛否両論である。前者に関しては、執事との友好関係から「癒し」を感じた女性客もいれば、執事との擬似恋愛関係を妄想する人もいる。だが、逆にその親密性が「執事との上下関係」という彼女たちが想定した「執事喫茶」のあるべき設定と一致しないため、執事と「お嬢様」との身分関係による「乙女的妄想」が喚起されないという意見もある。このような批判をあげる人にとっては、執事と「お嬢様」の身分差を表現できる距離が足りないからだ。

一方、執事と女性客の異性愛的関係性も「BL的妄想」にネガティブな影響を与えてしまう。「BL的妄想」に

は、主体と妄想対象の関係を切断する距離が前提となっているため、執事が客に接近しすぎると、「BL的妄想」を構築するための距離が確保できなくなるし、「BL的妄想」の邪魔になる異性愛的関係は当然排除すべきである。さらに、BL的パフォーマンスが「不自然」だから逆に「BL的妄想」が妨害されたという批判もある。「執事喫茶」は「BL喫茶」ではないので（FさんとNさん）、執事同士に対する「BL的妄想」はあくまでも二次創作である。この場合、妄想上のBLの関係性を構築するために、男同士のホモソーシャルとホモセクシャルな関係の連続性を切断する「距離」が必要とされる。

台湾の「執事喫茶」において、「乙女的妄想」にも「BL的妄想」にも共感できない、または日本と台湾の「執事喫茶」における「距離の差」を経験したと述べた調査対象の意見から、妄想対象との「距離」を調整することの必要性が浮上してくる。特に腐女子にとって、「BL的妄想」を構築するために、「距離」が最も重要な前提となっている。このような「執事喫茶」における妄想実践を、BLテキストをめぐる妄想と比べると、腐女子が「距離」を調整することによってセクシュアリティを操作することの差異が見えてくる。テキスト中のカップリングは腐女子にとってはあくまでも異次元に存在する他者に過ぎないため、腐女子は妄想対象との距離を保って妄想を操作する主導権を握っている。しかし「執事喫茶」においては、主体と執事は同じ空間にいて、主体と執事の関係、及び執事同士の関係は場合によって変わる。特に台湾の「執事喫茶」のように、執事が意図的にBL的なパフォーマンスをすると、主体にとって、本来受動的であるべきの妄想対象が能動的になり、主体は妄想を操る主導権を失うことになってしまう。たとえば、ミスをした執事に対する異なる責め方を見た客の感想を比較してみると、距離の調整の重要性が明確に見えてくる。「(ミスをした執事に) 急接近して彼の顎を触って、(客の目の前でわざと)『ちゃんとしないとお嬢様が怒るぞ』と説教した」という場面を目撃したNさんの批判に対し、「ミスをした執事をチラッと睨んで、慌てて彼のミスをカバーしようとした」と目撃したFさんはそれが面白いと捉えた。つまり、腐女子は執事の意図的な演出を批判する、または逆に彼らの非意図的な行動を観察して萌えポイントを見出す、といったことを通じて、「距離」を調整しながら、「BL的妄想」を構築し、その快樂を味わうのである。

おわりに

本研究は「執事喫茶」での妄想実践を事例に分析することを通じて、台湾人腐女子の「BL的妄想」の実践からセクシュアリティのあり方を分析した。「BL的妄想」を喚起するにあたり、男同士のホモセクシャルとホモソーシャルな関係の連続性を切断する「距離」が重要な基礎であり、腐女子が自由に男同士の関係性を操作して「BL的妄想」を構築するために、妄想対象との異性愛関係を結び付けない安全な距離を確保しなければならない。こうした「BL的妄想」が腐女子の主体にとって重要なのは、あえて対象と関係を作らない形で、萌え要素を自分の中で編集・解読することを通じて快樂を構築するという点にある。主体は対象との接触に囚われないため、距離が確保できる限り、快樂を膨らませていくことが可能になる。この快樂は必ずしも性的快感と関連するとは限らず、対象との接触によるものとも限らない。この快樂の根源は「理想の恋愛関係」に対する共感であり、腐女子は妄想対象と切り離れた距離で妄想するからこそ、意識的かつ能動的に妄想と自らの理想や経験を行き来することによって、想像上の幸福感を構築することができる。それこそが「BL的妄想」に見たセクシュアリティのあり方であると筆者は解釈する。

これまでのBL研究と異なり、「執事喫茶」での妄想実践を対象にして分析した結果、「妄想」という行為自体の新たな局面が見えてくる。「執事喫茶」という限定された空間・時間においては、主体と妄想対象＝執事の交流によって、主体と妄想対象との（異性愛的）関係が必ず発生する。「乙女的妄想」と「BL的妄想」を喚起する要素が共存する中、腐女子がどのような妄想をどのように構築するかという問題に直面するので、自分と妄想対象との距離や関係性を調整する必要性が浮上してくる。このような過程は動的であり、妄想がもたらす快感をどう味わうかは、主体が自分をどのような位置に置くかに関わる。こうした妄想は単に主体が一方的に主導権を握るという形ではなく、むしろ主体と対象との相互関係から生じた新たなセクシュアリティの操作形態とも言える。

東は腐女子は完全なる傍観者として、男同士の絆への妄想を交換・共有することを通じて、「女性のホモソー

シャル」が形成すると指摘している。しかし筆者は、「執事喫茶」における「妄想実践」は同好者と共有して快楽を膨らませるといった側面よりも、各々と妄想対象の距離や関係性が変わっていく中で、自分と妄想対象の相互関係を調整しながら能動的に構築していくという動的な側面に「妄想実践」の意義があると指摘したい。

さらに、「BL」を強制的異性愛規範を挑発する「実践」と見なすこれまでの台湾のBL研究（鍾，1999、他）の捉え方と異なり、台湾人腐女子の「執事喫茶」での「妄想実践」を考察することにより、より複雑なセクシュアリティの操作の実践形態を指摘した。つまり、前述したように、そのような「妄想実践」には、「日本発」という背景に潜んでいる「日本」に対する憧れ・妄想が作用している、ということがインタビューから窺える。彼女たちは、「台湾」と「日本」、及び腐女子と執事同士の相対的關係が相互作用している中で、自らの位置や対象との距離・関係を動的に調整しながら、妄想を構築する実践を行う。こうした過程において共存する多様な要素は、セクシュアリティの操作の実践形態をよりダイナミックかつ複雑にするのである。

以上のように、「執事喫茶」での妄想実践を分析することで、「BL的妄想」における「距離」の操作は、非接触的ながらセクシュアリティの操作を行う実践形態であると論じてきたが、この結論にとどまらずに、本稿で論じた台湾における「BL的妄想実践」を踏まえ、台湾における日本文化に対する憧れ、欲求や興奮、幸福感、快感といった感情がどのようにセクシュアリティの形態と関連するかを解明することは今後の研究課題である。

注

1. BLとは和製英語ボーイズラブ (BOYS-LOVE)の略称で、「攻め×受け」というジェンダー化された男性キャラクターで構成された(擬)男性同性愛を題材としたマンガ・小説などの作品を指している。(榎原, 1998; 東園子, 2010)。BLの愛好者である女性たちは「腐女子」と自称している。
2. 東園子 (2010)「妄想の共同体——〈やおい〉コミュニティにおける恋愛コードの機能」では、「やおい」という二次創作の愛好者のコミュニティは「妄想の共同体」として定義されている。
3. 「執事喫茶」は2006年に日本に誕生した。日本初の「執事喫茶」はブログ上の意見募集、コンサルティング会社での企画、及び大手書店の出資を通して、「乙女ロード」という「オタク女」の「聖地」と言われる地域に開設された(杉浦, 2006)。
4. 2010年の1月から2011年の8月にかけて、筆者は日本の「執事喫茶」一軒(5回)、台湾の「執事喫茶」二軒(A店で4回、B店で2回)において参与観察を実施した。主なフィールドであるA店の台湾の「執事喫茶」は2012年3月に閉店した。なお、台湾の「執事喫茶」A店の従業員1名に対してインタビューを行った。
5. この15名の腐女子歴は1年から10年までの差があり、大学生と社会人が半分ずつ占めている。その内の2名が両国の「執事喫茶」とも経験済み。この15名の腐女子以外に、一名の「腐男子」もいる。彼の経験、特にセクシュアリティの側面を腐女子の比較対象として捉えている。
6. 「編印連環圖畫輔導辦法」を始め、「國立編譯館」という審査機関によるマンガ(連環圖畫)に対する注意事項、審査基準などの法律が可決された。それらの法律はマンガの内容、構図、セリフ、創作の理念などに対して検閲を行うため、「漫画審査制度」と呼ばれている(周文鵬, 2007)。
7. 1970年代の少女マンガは発展しつつある一方で、パターン化とマンネリズムの傾向も徐々に見えてくる。このような現象からの脱却を目指し、竹宮恵子(1950-)、萩尾望都(1947-)、大島弓子(1947-)といった少女マンガ家が立ち上がり、少女マンガに革命をもたらした。彼女たちは昭和24年前後に生まれたため、「(花の)24年組」と呼ばれている(石田, 2008)。
8. ここで言う「原作」は、必ずしもテキストに限らず、ごく普通の男同士の絆と見なされる関係性さえあれば、たとえ無機物の擬人化であっても、それを「BL的妄想」の「原作」として捉えることが可能である。
9. セジウィックと東園子の論点をまとめて張瑋容が図表作(2011)。
10. 二次創作に関しては、個々の商品や作品の背後にある物語の舞台設定や世界観に消費者の関心が向けられる「物語消費論」(大塚英志, 2001)、または世界観という「大きな物語」を断片化した「萌え要素」によって蓄積した「小さな物語」として消費される「データベース消費論」(東浩紀, 2001)を参考にしている。
11. 大塚英志、東浩紀、及び東園子の二次創作論を基に張瑋容が作成(2011)。
12. 日本の執事は日本名を使うが、台湾の執事は台湾名を使わずに、日本名を使うことで、現実と切り離れた妄想空間を作り、自らの個性をアピールする。筆者はこの点を台湾の「執事喫茶」の独自性として捉える。
13. 注3の通り、日本の「執事喫茶」はオープンまでにブログでの意見募集、コンサルティング会社の企画などを経たが、台湾の「執事喫茶」は出資者とスタッフ数人の打ち合わせだけで開店したそうである。
14. マンガとアニメ『黒執事』、またはフジテレビ系のドラマ『メイちゃんの執事』が挙げられる。

15. 砂糖をたっぷり入れようとした「お嬢様」が、執事に「お嬢様の健康のために、糖分の量をお控え下さい。」と言われたというエピソードが挙げられる。
16. 大塚英志、東浩紀、及び東園子の二次創作論を基に張瑋容が図表作（2011）。
17. 乙女ゲームとは「ユーザーが（事実とはともかく心は）乙女であること」、「主人公が10代の乙女であること」の両面を指すと考えられる。1994年にコーエーから発売された『アンジェリーク』がその1作目と言われており、代表作は『遙かなる時空の中でシリーズ』、『ときめきメモリアル Girl's Sideシリーズ』など。後者は2002年に発売され、このジャンル自体が確立した基点としている。このヒットを受けて女性向けゲームは市民権を得、本格的に女性向け恋愛ゲームの市場が開拓されていった。その後、BLを扱ったゲームの流れが派生した。ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B9%99%E5%A5%B3%E3%82%B2%E3%83%BC%E3%83%A0（2011/02/23閲覧）
18. 「ニコニコ歌い手」とはニコニコ動画という動画サイトにおいて歌ってみた動画を投稿している人たちの総称である。当サイトでは、投稿者がプロか一般人かを混同しないように、前者を「歌手」、後者を「歌い手」と分けて使っている。<http://dic.nicovideo.jp/a/%E6%AD%8C%E3%81%84%E6%89%8B/>（2012/08/16閲覧）

参考文献

- 東園子（2009）「女性のホモソーシャルな欲望の行方——二次創作（やおい）についての一考察」大野道邦・小川伸彦編集『文化の社会学：記憶・メディア・身体』文理閣，pp.263-280。
- （2010）「妄想の共同体——（やおい）コミュニティにおける恋愛コードの機能」東浩紀・北田暁大編集『思想地図vol.5特集・社会の批評』日本放送出版協会，pp.249-274。
- 東浩紀（2001）『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』講談社。
- イヴ・K・セジウィック（2001）『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会（Eve Kosofsky Sedgwick（1985）*Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*）。
- 石田美紀（2008）『密やかな教育—“やおい・ボーイズラブ”前史』洛北出版。
- 上野千鶴子（2002）『発情装置』筑摩書房。
- 大塚英志（2011）『定本 物語消費論』角川書店。
- 榎原史保美（1998）『やおい幻論』夏目書房。
- 杉浦由美子（2006）『腐女子化する世界—東池袋のオタク女子たち』。中公新書ラクレ。
- 水間碧（2005）『隠喩としての少年愛』創元社。
- 米沢嘉博（1980）『戦後少女マンガ史』新評社。
- 李衣雲（2002）「台湾漫画が文化の場に占める位置の転換」『東京大学社会情報研究所紀要』（62），pp.191-216。
- （2005）「実像と虚像の衝突——戦後台湾における日本イメージの再上昇の意味、1945-1949——」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』（69），pp.137-159。
- （2010）「解析「哈日現象」：歴史・記憶與大眾文化」『思想』（14），pp. 99-110。
- 周文鵬（2007）『臺灣漫畫審查現象及其對國內漫畫發展影響之研究』，私立淡江大學中國文學系碩士論文。
- 張茵惠（2007）『薔薇纏繞十字：BL閱聽人文化研究』，國立台灣大學新聞研究所碩士論文。
- 葉原榮（2010）『王子的國度：台灣BL（Boy's Love）漫畫迷的行為特質與愉悅經驗之研究』，國立台灣藝術大學應用媒體藝術研究所碩士論文。
- 楊曉菁（2005）『台灣BL衍生「迷」探索』，國立政治大學廣告研究所碩士論文。
- 鍾瑞蘋（1999）『同性戀漫畫讀者之特性與使用動機之關聯性研究』，私立中國文化大學新聞學研究所碩士論文。